

神戸だからできる交流を

震災支援シンポ「あの時・これから」

写真左から 須田善明氏
金川章三氏 渡辺由和氏
吾郷信幸氏 金芳外城雄氏



講演・体験談…400人が共感

「阪神から東北へ～交流・連帯・絆」をテーマにした震災支援シンポジウムは16日午後1時、古後健一（福18）の司会で開会。堺汎理事長が5年目を迎える東北支援活動への意欲をこめて新年の抱負を述べました。

次いで、女川町長・須田善明氏が「女川町の今」と題し、復興状況を説明しながらコンパクトシティの構想を示し、「千年に一度の町づくりをしたい」と、42歳の若い町長らしい熱い思いを語りました。

第1期生の金川章三氏は「大震災で村の温泉が開放され入場者の整理を手伝った。多い時は3000人も押し掛けた」という体験談を披露。カレッジ再開に奔走した渡辺由和氏（元課長）は、ボランティアの有志をまとめ、グループ〈わ〉誕生に漕ぎつけるまでのエピソードを明かされました。

第5次メンバーが活動報告

この後、第5次隊の支援報告が行われ、市民福祉振興協会の吾郷信幸氏は、救援募金・応援メッセージ、音楽やパフォーマンスによる被災地訪問など、4年間の協会としての活動を振り返り、「神戸だからこそ出来ること」をこれからも続けたい、と強調しました。

次いで第5次チームの記録ビデオ（15分）が上映され、子供たちや住民の皆さんとの和やかな交流風景が大画面いっぱいに映しだされました。波多野武郎（食16）と橋野美子（わ会員）が5日間の活動を振り返り、女川の2つの保育所を初めて訪問したこと、スポーツ大会や料理交流会が大変喜ばれたこと、女川小・閑上小の子供たちとは顔なじみになり歓迎されたことなどを報告。会場の共感を呼びました。

NPO神戸の絆2005の金芳外城雄氏は、「近い将来に予想される巨大地震にどう備えるか」と題し、防災・減災の専門家の立場から、珍しい映像を織り込んで生活防災や自助・共助の大切さを訴えました。



ここで協会チームの体操メンバーが登場。会場の参加者と軽くストレッチ体操やって体をほぐし、みんなで「花は咲く」を歌ってひと息入れました。この後、東北プロジェクトチームの南形徹（生14）が、講演で話された内容をまとめ、「東北支援を継続しよう」と訴えてシンポジウムを締め括りました。

最後に、カレッジ事務局長・藤本義兼氏が閉会のことを述べ、午後4時散会しました。

この日、会場には現役生・卒業生ら約400人が詰めかけホールはほぼ満席になりました。ジョイラックデーでもあり、過去の報告会より現役生の参加が目立ちました。ある現役生は「被災地の現状など、いい話が聴けた」と満足そうでした。＝写真④

「阪神・東北」の写真パネル展示

1フロビーには阪神や東北大震災、東北支援活動の写真パネルが展示され、来場者が熱心に見入っていました。作品は、神戸新聞社から提供された阪神・東北被災地のもの、第5次隊が現地でも撮ってきたものなど120点です。

（東北プロジェクト 南形徹・生14）